ヨハネの福音書　第 14 章　1 節ａ

「わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。」

電車の中でたまに見る光景がある。親子、父というより多くの場合は母の手を握りながら外を見ている。父は会社での仕事が忙しく、出かけ易さは母だからかもしれない。今は必ずしもそうではない。女の子より男の子のほうが電車に興味を持ち、早いスピードで過ぎ去る風景に見とれている。今日もその光景を見た。

母に手を引かれ乗車してきた 3、4 歳ぐらいの男の子がいる。電車が動き、外の景色を見ていた。間もなく母親との会話が始まった。母はしゃがみ込んで会話をする。会話の詳細は聞こえてこないが、どうもお気に入りの電車に乗ったものの、帰宅するための路線ではないようだ。家に帰るためには、電車を乗り換えなければならない。それを男の子に説得しようとしているようだ。そうこうしているうちに、男の子の声がはっきりと聞こえた。「お家に帰らなくてもよい。」よほどお気に入りの電車に乗っていたのだ。

男の子には、家に帰らなくてもよい、と言わせるだけの根拠があった。一つは、なによりもお気に入りの電車に居たいこと、そして、こちらがより肝心なことである。母親といっしょなら家に帰らなくてもよい。彼にとっては、母親が家なのだ。

2022 年 2 月 5 日